



道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信 第9号
令和7年2月14日(金)
発行者 校長 井浦 博史

Good communication makes us happy.

3学年職員

ある日の夜、私は仕事を終えて車で帰宅していました。20時頃だったのでしょうか、信号のある道路を右折するため交差点内にいた時、対向車線から自転車に乗った高校生くらいの女性が直進してきました。直進の信号は青だったので、当然私はその自転車が通過するのを待ちながら、自転車を見ていました。その時、その自転車に乗る方は自転車をこぎながら、こちらに向かって会釈をして、右手を少し挙げて合図を送りました。こちらへの目線と会釈によって、私はその右手の合図が「ありがとう」「どうも」と伝えているように感じました。

私は驚きを隠せず、その方を二度見してしまいました。信号は青なので、その自転車が直進することは当然です。右折車の私が待つことも当然です。本来はそのような合図はしなくても良いと私は考えていました。それにも関わらず、その方はわざわざ私に何かしらの気持ちを、身振りや態度によって伝えてくれたのです。私は驚きましたが、「なんて気持ちの良い人がいるのだろう。」と本当に嬉しくなりました。言葉以外の手段(身振り手振り、視線、服装、表情等)、たったそれだけで、その方の気持ちは十分に私に伝わってきました。

私はこの出来事から2つのことを考えました。1つ目は、言葉以外の手段のコミュニケーションが私をあれだけの気持ちにさせたのだから、直接言葉で伝える時は、もっと相手に気持ちが伝わるだろうということです。これは私たちの言葉の伝え方一つで、良い意味でも悪い意味でも強く伝わると思います。

2つ目は、相手への気遣いや周りの人も気持ちよく思ってもらえるような言動が、誰かを幸せにするということです。地域社会の中で様々な人々と関わって生きている私たちは、自分の言動に自覚と責任をもちながら、周りに配慮して過ごしていくことが必要ではないかと感じました。

新紙幣一万円の顔 渋沢栄一とはどんな人？

2学年職員

みなさんは、お正月にお年玉をいただきましたか。多くの方が多少なりとももらっているのではないかと思います。いくらもらえたかに気を配っていると思いますが、みなさんはお金の紙幣に誰が描かれているのかわっていますか。

千円札には、北里柴三郎。五千円札には、津田梅子。

一万円札には、埼玉の偉人の一人であるの渋沢栄一が描かれています。



今回はみんなの故郷埼玉県の大偉人である渋沢栄一がどんな人物かを紹介します。渋沢栄一は、天保11年(1840年)に血洗島村、現在の深谷市に生まれました。彼は慶応3年(1867年)に渡欧し、西欧の多くの先進国を訪れ、経済制度や近代的技術を目の当たりにしました。帰国後、彼は、明治新政府に出仕して、租税についての処理、新貨や造幣に関する規則、国立銀行条例などに関わり、実業家として躍進していきます。常に「論語」を基本理念とし、道徳経済合一説を唱え、第一国立銀行をはじめ、鉄道・紙幣・造船など多くの企業の設立・育成に関わりました。

(埼玉県「埼玉県の三偉人」リーフレットの引用)

そのような渋沢栄一は、世のことについて次のように述べています。「すべての世の中の事は、もうこれで満足だという時は、すなわち衰える時である。」つまり、真の幸福とは、「満足したい」と飢えて直向きに努力し、それが手に届かない状態なのかもしれませんね。



宿題と私

アップピースマイルサポーター

私は小学生の時は、帰宅すると友達とよく遊びました。ただそれには両親から二つの条件がありました。一つは家の手伝いを済ませてからにすること、二つ目は帰宅時間を絶対に守ることでした。遊びたい一心でしたから守った方だと思います。その一方で、家であまり勉強をした記憶がありません。例えば、夏休みの宿題などは、2学期始業式の2日前位に親に叱られて泣きながらやっていました。

このような私でしたが、中学校に入学しました。中学校では各教科で先生が異なることや、先生により板書する速度が違うので、ノートに書き写すのに戸惑い苦労しました。それから、もっと大変だったのが宿題です。毎時間宿題を出す教科があったのです。その教科は数学でしたが、宿題はするものという自覚がなかった私は、「それでは、次の授業までに～を必ずやって授業の最初に見せなさい。」と先生に指示されても脳天気「ハ～イ」と元気良く返事をしたもののやらなかったのです。

その結果、当然先生から幾度となく叱られる羽目に……。5月下旬には、宿題を平気でやってこない者としてレッテルを貼られてしまいました。こうなると、たまに気が向いた時にやっていっても、よくやってきたではなく、あれどうしちゃったのかな、珍しいと先生に言われる始末でした。ところが、小学校時代からの仲の良い友達というと、これが私と違ってしっかりやってきていました。部活動もあって疲れているはずなのに……。

その日暮らしだった私もさすがに5月末にはこのままではいけないと思い始めました。そして、6月から帰宅後、机に向かう時間を決めて宿題に取り組むことにしました。しかし、決まった時間に自ら机に向かう習慣などなかった私は、15分もすると眠くなり寝てしまうことがありました。そのような時は、朝方5時に起きて宿題をやりました。それは、一度や二度ではありませんでした。しかし、さすがに5時起床は辛く、学校から帰宅してから休まずにすぐ机に向かうようにしました。

そうすると、初めの頃は15分程度だった机に向かう時間は、30分、定期テストが近い場合は、1～2時間と徐々に延びていきました。数学の先生や級友の反応はと言うと、宿題を見せるようになった私に当初怪訝な表情を見せていましたが、6月、7月、夏休みを挟んで9月になっても必ず宿題を見せる私に疑いの目ではなく、にこやかな表情を見せるようになったのでした。9月に入って一度うっかり忘れたことがありました。俯き加減でしょげている私に「まあ、こういうこともあるよ。次回は忘れずに。」と先生が声を掛けてくださったのです。内心ほっとしたことを覚えています。

そして、その後の中学校生活においては、他の教科の宿題も含めてほぼ忘れることなく提出期限を守ることが出来たのでした。



「熱海への旅」

アップピースマイルサポーター

今年の旅は夏休みを利用して、近くて遠い熱海へ行くことにしました。

熱海駅に着くと、大勢の観光客でにぎわっていました。足湯を楽しむ人、バスを待つ人、友達と笑顔で話す人。私たちは周遊バスで市内を散策することにしました。いろいろな方面行きのバスが有り、どれにするか迷ったのですが、1カ所ずつ散策し、また乗って次の場所へ進めるものにしました。

初めに、かの有名な海岸近くの寛一お宮の松、横目で見ながら通り過ぎました。次は熱海城。「城」という名前にひかれて降りることにしました。だれが築城したのかとワクワクしながら降りてみました。しかし、それはなんと最近観光のために作られた城だったので。中は商店街？最上階に昇ってみたら、遠くの島まで見えて景色は最高！それなりの代金を払った価値はありました。

次は私が行って見たかった「起雲閣」。起雲閣は海運王ともよばれた内田信也により1919（大正8）年に建てられた日本の伝統的な建築美を伝える建築です。その姿は大正の浪漫が薫り立っていました。1929（昭和4）年に根津嘉郎により建てられた洋館は、格調高い雰囲気にあふれ、その栄華を今に伝えているものでした。さらに1932（昭和7）年に建てられた洋館は1947（昭和22）年に旅館に生まれ変わり、熱海を代表する宿として、宿泊客を迎え山本有三、志賀直哉、谷崎潤一郎、太宰治、船橋聖一、武田泰淳など日本を代表する文豪たちにも愛されてきました。市街地とは思えない緑豊かな庭園、これらの施設は歴史的文化的遺産として未来に継承されています。

非日常を味わい、リフレッシュした旅になりました。毎日旅行に行くことはできません。ストレスが溜まったり、疲れたなと感じたりした時には深呼吸や体を動かして、気分転換を図れるといいですね。